或問　WAKUMON　99
No. 2 (2001) pp. 99〜101

『和製漢語の形成とその展開』

陳　力衛

漢語が日本に入ってからすでに長い期間が経っている。その間、音韻・形態・意味の面にわたって中国本土のものとずれが生じて、さまざまな変化が起きている。その変化は、当然ながら日本における漢語の受容に伴ったものが多く、変化の規模、範囲も時代や資料の性格などによってまちまちである。一方、漢字の表意性と造語力を生かして、中国本土にない新しい形や組み合わせを日本語の中で独自に造っていくものもある。それを和製漢語と呼ぶことができよう。和製漢語の定義をみると、大体「漢語の日本語化の一つとして、日本で生まれた漢語（字音語ともいう）を和製漢語と言い、本来の漢語（中国語）にない漢語である。」（『漢字百科大辞典』）のように「おほね→大根」のような訓読みから音読みへ変えた語、「夜前」のような日本人独自に作った語、そして江戸時代のオランダ語の翻訳と幕末から明治にわたる英・仏・独等の翻訳語、という三部分が含まれている。

本書は、和製漢語を専門的に取り上げ、その形成過程と造語パターンを歴史的に分析したものである。そうした和製漢語の枠組みを提示しようと思って、まず漢語の日本語における位置付けとその周辺概念の確定過程を明らかにしつつ、和製漢語の範囲を定め、大きく中国語出自と日本独自の創出とにわけて分類を試みた。そして和習や漢語の意味変化を基準とした和製漢語の判断に疑問をいだき、より形態的な変化を重視する立場をとっている。具体的に、五章にわたってその形成の類型に焦点を当てて考察している。

第一章では、いわゆる和訓と漢字との出会いから「訓読みから音読みへ」というもっとも狭義の和製漢語の形成を見、和訓の発達と字音の働きを中心に和製漢語の形成基盤を探っていく。とくに漢文訓読を通して次から次へと漢字の意味を吸収し一訓多字という表記の多様性を有する和訓の役割を捉え、漢字と和訓との意味的非均衡性を和製漢語形成の素地とする。また、漢字レベルの和化も和訓の発達によるものと考えている。一方、字音による統語では長い音節の和語（品詞をとわず）を全部名詞に換える文法的メリットを発揮させ、表現上の便宜をもたらしていることも和製漢語形成の要因の一つと考えている。

第二章では音韻変化によって新たな形態創出をもたらす表記の書き換えを和製漢語形成の重要パターンと見なし、本来漢語出自のものと、仮名書き漢語を視野に入れ、具体的に「文

盲」「化粧」「棗龜」という語の形成過程を史的にたどっていく。とくに意識的な書き分けの背後にある忌み意識を重要視している。

第三章ではおもに語構成による和製漢語の造語を歴史的に見、その形成パターンのもつ生産的な特徴を把握し、とりわけ連用修飾による和製漢語造語の過程を浮き彫りにする。つまり同じ漢語に見えるのに、日本と中国における語構成の理解が異なる点を重視する。連用修飾による熟語の多くは中国語では文の単位として扱うのに、日本語では語の単位として扱うところから、和製漢語として成立しやすい文法的基盤を強調している。

第四章では、近代語を中心に、新漢語、訳語そして明治人の漢語意識を通して和製漢語のかかわる資料を取り上げる。とくに漢訳洋書や英華字典などを通して中国から直接流入してきた部分と、『哲学字彙』など日本で独自に訳された部分とに分けて論じている。さらに近代国語辞書における字音語の扱い方を通して明治時代の人々の和製漢語の意識を探る。

第五章では日中言語の比較を中心に、同形語の見地から和製漢語の中国語に逆輸入された状況と、現代中国語文法に馴染まない和製漢語の特徴を考察する。そして和製漢語の増加によるあらたな類義語の産出に、日中両国語がそれぞれどう対処し、意味的にどう補完しているかを捉える。最後の終章では現代日本語の一環として和製漢語の量的な分布とその未来像を展望する。

本書は外国人の視点から自国語との対照を通して和製漢語を捉えようと、ある意味では既成の方法論からの脱却を図った。そして時代的にも上代から近代まで幅広くその問題点を捉えようとしている。その形成過程においてほかならぬ日本語の構造が深く関わっていることを明らかにするとともに、日本人と中国人の言語意識の相違を再認識させられた。むろん、未熟な点やカバーしていない部分も多く、今後の課題としてさらに研究していきたいと思っている。

目次

序　章　和製漢語の概念とその問題点
　第一節　和製漢語研究の現状
　第二節　和製漢語の範囲と分類
第一章　和製漢語発生の素地
　第一節　訓読みから音読みへ
　第二節　漢字字義の日本的変化
　第三節　和訓の発達にみる漢字の役割
第二章　音韻変化による表記の変容
　第一節　同音や類音による異表記の産出

第二節　「文盲」考——「蚊虻」との関係を中心に
第三節　「化粧」考——意味と表記の変遷
第四節　「棗龜」考——忌み意識による書き分け
第三章　語構成による和製漢語の産出
第一節　語構成から見る和製漢語の特質
第二節　副詞による連用修飾の語構成
第三節　語構成と出典例とのかかわり
第四節　現代語における連用修飾の語構成
第四章　近代における和製漢語の生成
第一節　新漢語の構成
第二節　明治初期における漢訳洋書の受容
第三節　『哲学字彙』における訳語の成立——著者の自筆稿本による第三版の改訂・増補を中心に
第四節　近代国語辞典における字音語の扱い方——和製漢語を類別する意識
第五章　現代中国語における和製漢語の受容
第一節　日中同形語の視点
第二節　和製漢語の受容による漢語類義語の形成
終　章　和製漢語の行方
付表　1　中・日現代漢語対照語彙表にある「日本の文献を出典とする語」一覧
2　『漢語百科辞典』に収めた「和製漢語」一覧
3　『三省堂国語辞典』（第四版）ラ行における「和製漢語」一覧
あとがき／参考文献／語彙索引／人名・書名・事項索引

A5 判　466 頁　定価 12000 円／汲古書院　2001 年 2 月 28 日刊

陳　力衛（ちん　りきえい）　目白大学短期大学部 助教授 国語学

第4回研究会における研究発表（愛知大荒川氏）

ドイツエルガンゲン・ニュルンベルク大学ラークナ教授（朗宓榭）一行が
関西大学を訪れる（イヴォン女史、阿梅龍氏、顧有信氏、徐艶女史、ラークナ教授）